

---

# **廃屋にて**

瓢六玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廃屋にて

### 【Zコード】

Z3257J

### 【作者名】

瓢六玉

### 【あらすじ】

予備校生の僕と圭ちゃんは、アベックの間で評判になっていた廃屋のホテルに潜入した。その夜、事件は起こった・・・。

(前書き)

これはホラーというよりも「青春コミカル・エロティカル・サスペンス」というジャンルかもしれない。

僕と圭ちゃんは予備校生の分際で、この夏休みに無断外泊というよからぬ計画をこつそり立てていた。

決行日は、地獄のような夏季集中講座が終わる翌日の予定である。自分たちへのご褒美なのだ。

ただし、両方の親を慎重にダマさないとバレたときが一大事である。

\* \* \*

さて、身も細るほど勉強した甲斐あつて来るべき日がやつと来た。案ずるよりナントヤラで…どつちも友達んちにお泊まり勉強しにいくといつウソみたいな嘘で親を見事にダマくらかしてきた。

チヨロイもんである…。

でも、バイトもできぬ哀しき予備校生の僕たちは一人合わせて2万チョボチョボという情けない所持金しかなかつた。

これでは、ちょっと遠出をしたら旅館やらホテルになぞ泊まれるものではなかつた。

それで、ネットであれこれ調べていたらH湖畔に、数年前に倒産して廃屋化しているリゾートホテルがあり、知る人ぞ知るビンボーアベックのラヴホ化しているという。

電気こそつかないが、まだ、ベッド、寝具いつさいがそろつていて、しかも外には露天の岩風呂が源泉掛け流し状態で今もコソコソと湯があふれ出でているそつな。

だがしかし…だがしかし…

世の中、二つよいことさてないものよ、といつ。

この夢のような条件のタダホテルにも難点がひとつあつた。

それは、出る…

という噂なのである。

掲示板には、半分以上はウソと思つが、靈を見た、だの怪奇現象が起きた、だのというまがまがしい記事がまことしやかにカキコされていた。

僕は、ちょっとヤバそう…と、思いながらも、宿泊代がタダで、温泉付き、しかも本物のスリルとサスペンスを味わえるアドベンチヤーランドじやん…と、考えれば、この美味しいプランを棄却する理由がなかつた。

だけど、圭ちゃんにはこのことだけは隠し通さねばなるまい。

あとで、実は幽霊屋敷だったということであれば笑い話にもなるうが、行く前では

「何、考えてんの！」  
と一蹴されかねない。

何より、僕の好奇心と妄想を膨らませてくれたのは湖を見下ろすロマンティックな露天の岩風呂での圭ちゃんの、もしかしたら見られるかもしれないヌード姿である。

「人間的好奇心は、恐怖心に勝る」  
という僕流格言がひとつ出来た。

\* \* \*

僕たちは、昼過ぎに駅のプラットフォームで待ち合わせした。

なるべく、どんな知人にも目撃されないよう配慮して、電車に乗るのにも、あたかも他人の如く装つてサッと乗車した。

そして、なるべく人気のない車両に移つていちばん端のボックスシートに落ち着いた。

「めっちゃ、暑かつたねえ…」

「うん…。もう、背中、びっしょりよ…」

チラと見ると圭ちゃんの白地のTシャツはペツトロ背中に貼りついていてブラの白い紐がクッキリ浮いていた。

隣に腰を下ろしながら僕はドキドキと時めいた。

「着替えあるんでしょ…」

「うん。でも、こんな暑きやいちいち着替えてもキリがないもん。夜まで、着干しにしちゃうわ…」

「そだね…」

「あ…。臭つたら、『めんね…』

「つづん…。だいじょーぶだよ…。

圭ちゃんのは臭いじゃなく、香りだもん…。

ハハ…」

「なーに、それ？」

「あ、いや、ほら…。

便所の臭い、つては言ひけど、マツタケは香つ、つて言ひでしょ。逆に、便所の香り、つては言わないもんね…」

「ああ、そうね。たしかに…」

僕は内心、少しばかり得意げになつた…。

「じゃ、私はマツタケってわけ？」

僕は一ヤリとして言った。

「そう。上等のマツタケ…。

だから、今夜、僕に食べられちゃうの」

「ワーッ。ビーしょー…」

と彼女は笑つた。

ガラガラのコンパートメントで人目がないのをいいことに僕たちは互いに体を寄せあって何度も口づけを交わした。

(「ほーび、じほーび…）

と僕はそのたびに自分に言つて聞かせた。

それは、灰色の浪人生活のまさに夢のようなひと時であった。

「好きよ…。スキ…カつちゃん」

圭ちゃんは僕の胸に顔を埋めるといつぶやくつて言つた…。

木造の駅舎に降り立つと僕は緩みかけたショーツの紐をキュッと  
なおして、これから登る山道に備えた。

高原にあるH湖までは歩いて十数キロの道のりがあった。  
圭ちゃんは中高とバスケで鍛えただけあって軽々と山道を登つて  
ゆく。

僕はと言えば、数キロも登らないうちにフクラハギがパンパンになつてきて途中、幾度か彼女に休憩を申し入れた。

さすがに、十数キロの軽登山は小一時間はかかった。

ゴバルトブルーのH湖は絵に描いたように美しかった。  
けれど、湖畔にたたずむ汗に額を輝かした僕の圭ちゃんはむりに  
それを上回るほどにキレイかつた。

なんか、とても幸せな気分いっぱいだった。  
生きててよかった、と素直にそう思った。

湖畔からやや見上げたところに噂のホテルがあつた。

2、3年前に閉館したというので思ったよりもキレイな外観でな  
んとなくホツとした。

廃屋侵入計画について圭ちゃんは了承していた。やつぱりお互い  
遊び心のある年頃であるから。

ただし、例の件…いや、靈の件…は黙っていた。

さて、いくら廃墟とはいえ建造物不法侵入になることは間違いない。  
万一、現所有者に雇われた警備会社が見回りに来ないとも限ら  
ない。

でも、そんなリスクがあつてこそアドベンチャーである。怪奇  
現象だつて、あるやもしれない。

もうすでに、親もダマしていることだし…。

あ、圭ちゃんどこもダマしてるな…。

あ～ッ！ 僕はこうやって、どんどん罪を重ねていくのかーッ！  
と、アホな独り心中芝居をしながらでも、やつぱ、圭ちゃんの裸

は見たい！

…とスケベ克宏が本音を吐いた。

そうだ、ホリエモンだって投機にハイリスク・ハイリターンはつきもんだ、って言ってたもんな。

でも、ホリエモン、つかまっちゃったし…。

と、ワケワカラニ屁理屈を思い浮かべながらも

僕は、ただひたすら圭ちゃんと今夜、結ばれることのみに全神経を集中させていた。

多少のリスクがなんていッ！

と、僕はにわか江戸っ子ぶつてみた。

\* \* \*

隠れ入り口は『廃屋潜入！』という怪しげなサイトでしつかりチエックしてきた。

まるでRPGの主人公にでもなったような気分である。

情報どおり、湖側の植え込みに人ひとりがやっと通れるだけの隙間がちゃんとあった。

そこからすぐに露天の岩風呂に通じている、といつのである。

しかし、その植え込みから湖側はすぐに松林の切り立った急斜面でもし足を滑らせたら数十メートル下の湖まで転げ落ちそ�でもつた。

アドベンチャー・ゲームの第一関門である。

まず、僕が先にトライすることにした。

こう見えて、中学以来テニス部のキャップだったのだ。文化系のウンチ（運動音痴）とは違う。

体育系の圭ちゃんも難なくクリア。

垣根を越えるともうそこはもうもつもつと湯気のあがる露天岩風呂だつた。

そして、そこから館内にも驚くほどアッサリ侵入できていさせか

拍子抜けするくらいだった。

午後の4時をすぎていて、夏の日はまだ高かつたが灯り一つない館内はやはり昼なお仄暗く、不気味といえぱいえないこともなかつた。

僕たちは最も近い一階の客室から探索を始めたが、ほとんどの部屋は完全にオートロックされておりそのことはネット情報にもなくてかなり面食らつた。

ワンフロアに30室はあり5階まで丹念にガチャガチャとドアノブをチェックするのは一苦労だった。

どこも駄目で、半分以上あきらめかけていたとき5階の端のプライベート・ルームのドアがスッと開いた。

ビンゴーッ

さつそく侵入すると、ベッド、寝具類、いっさいがそろつっていた。従業員用部屋なのだろうが、内装は客室とそれほど違つとも思えなかつた。

ベッドが一つあつて、その間の壁には豪華な風景画をえ掛けであつた。

「よかつたね」

と僕が言つと、圭ちゃんはちょっと顔色を曇らせて  
「なんだか、この絵、陰氣くさいわね」

と言つた。

そう言われば、色調の沈んだ暗い色合いだが落ち着いた画風といえば言えないこともないかもしれない。

どうもこの部屋の窓から見た湖と木立の風景のよつでもある。

「ねつ、ここ見て…」

圭ちゃんがちょっと怯えた素振りで言つた。

「エッ？ なに…」

彼女が指さす画面の右下には緑の木立の中に向やう灰色の矩形のものが描かれていた。

「これってお墓じゃない？」

圭ちゃんが嫌そうな口振りでいった。

そんな風に見えなくもない。

僕は、もしかして…と、窓辺に寄ると、それはまさしく絵そのものの風景であった。

そして、さつき乗り越えてきた露天風呂の垣根のずっと下の方に、絵と同じ灰色の墓石のようなものがハッキリと見えた。

この景色とこの絵が来訪者のさまざまな憶測をよんでも掲示板面白可笑しく尾ヒレがついてカキコされたのかもしれない。

そう思うことにした。

いつの間にか、圭ちゃんがそばに寄ってきて木立を見下ろしていた。

「やだあ…。ほんとにアレあるのね」

と彼女は嫌悪感を露わにした。

僕はすかさず肩を抱き寄せると

「大丈夫だつて…。何でもないさ…」

と平気を装つて彼女の不安を取り除こうと努めた。

(やつぱり、ここつて安からう悪からう…なんかしらん)

と内心チラリと思ったが、すぐに、ブルルッと頭を振つてそれを吹き飛ばした。

\* \* \*

その夜。

僕と圭ちゃんはどこおりなく結ばれた…。

そして念願の露天風呂にも一緒に入れた。

それだけで僕の不安は霧が晴れたようにスッカリなくなつた。

生まれてこの方味わつたことのない幸福感と甘美な気分に酔いしれていた。

\* \* \*

夜も更けて一人で抱き合ごひとつベッドで眠りに落ちつけとしていた時だった。

ダタンッ！

…という、何かが落ちたような音が廊下の遠くでした。

僕はちょっとドキリとしたが腕の中の安らかな圭ちゃんの寝顔を見るとホッと安心した。

枕元には電池式の灯りがあり薄暗いオレンジ色の光をあたりに放つていた。

何気なく頭上の絵に目をやった。

すると、気のせいいか右下の墓石の位置が微妙にズれているような気がした。

僕は気のせいだと思って、可愛い圭ちゃんの唇にそっとキスした。でも、やはり気になつてまた上目使いで見ると、明らかに夕方に見た位置からは少しズレているように見えた。それで半身を起こして灯りを近づけてとっくりと見てみた。墓石が斜めに傾いていた。

そればかりか、少しばかり土が盛り上がつているようにも見えた。

(ウソツ！：んな)

僕は圭ちゃんの寝顔と絵を交互に見て、ついに今まで見逃していた白っぽい点を墓石の下あたりに見つけた。

それは遠目には白い点だったが灯りを近づけて見ると、まさか…だが、人の手の平のようにも見えた。

そこで、また…

ダタンッ！

という鈍い物音が廊下に響いた。

（なんで？一回も、誰もいない廊下で物音がするんだ…）

僕はとつさに毛布のなかに潜り込んだ。

\* \* \*

（やつぱり、噂はホントだつたんだ…）

僕は今頃になつてこの無謀なアドベンチャーを後悔しあじめた。  
しかし、今は愛しい圭ちゃんと一緒に。

彼女だけは、圭ちゃんだけは何としても譲らなければならぬ。  
男として…。いや、もう恋人として…。

臆病な僕は決然と…否…恐る恐る、毛布から飛び出した。  
相変わらず天使のように安らかに眠る美しい彼女の寝顔がそこには  
あつた。

その穏やかさに僕は安堵し勇氣をえられました。

それで、意を決して今一度、あの絵と対峙することにした。

灯りを近づけると全身に悪寒が走った。

墓石を倒し、盛り上がつた土の中から長い白髪の老婆の半身が地面に顯れているではないか。

僕はその信じられない絵の変容、ふりに目をつぶることも、顔を背けることも出来ないでいた。

「ケ、ケ…圭ちゃん…」

僕は今にも泣き出しそうだった。

だが、枯れたきつた声では「眠れる廃屋の美女」を目覚めさせる  
ことも出来なかつた。

そのまま眠らせておくという手もあつた。  
田覚えさせて彼女を恐怖の底に突き落とすことは残酷なこと  
でもあつた。

このパニック状況下で僕の足りない頭はグルグルと迷走し、混乱の極みとなつた。

勇気を振り絞つて再度、絵に目をやつた。

白髪の老婆はすっかり全身を顕わし、今まで歩かんとしていた。その先には、僕たちの侵入してきた垣根の隙間があり、露天風呂があり、館内に入ることができるのだ。

あの怪音は、いわゆるラップ現象なのだろうか…。勝手に聖域を侵した僕たちをあの老婆は番人として咎めに来るのだろうか。

\* \* \*

僕は恐怖の展開を予想して採るべき策を思案していた。

そして、非合理的ながらもひとつの妙案が浮かんだ。

それは、3年前に亡くなつた定期入れに入っている兄の[写真]を入り口に向けて立てよう…

つまり兄を結界として亡靈の侵入を阻止しよう、といつ愚考である。

でも、他に何も考えが浮かばなかつたのでこの心細い策に頼るしかなかつた。

僕は、さっそく、椅子をドア側まで運ぶと、定期入れの兄の[写真]を開いてドアに対峙させるように立てて置いた。

後は、運を天に…そして、亡き弟思いの兄貴に頼るしかなかつた。（兄ちゃん。頼むッ！）

圭ちゃんと僕を護つてくれ…）

そう祈るような気持ちで僕は意氣地なくまた毛布にもぐりこんだ。そして、圭ちゃんの豊かな胸の谷間に顔を埋めると、怯える幼児のようにすがりついた。

もつ、絵の老婆がどこまで来たのかを見る勇気はとうに失せていた。

いや、見なくともワカル。

ここを目指して来ることが…。

この恐怖の時間は長く…

しかし愛する人の温もりは怯える幼児に無言の安全感・安心感・

大丈夫感を与えてくれた。

もし、ここに僕一人だけだったら、きっと発狂していたに違ない。

い。

\*\*\*

どれぐらい経つたろうか。

僕は自分たちがあの垣根から侵入してこの部屋まで辿り着いた時間から老婆の歩みを推し量つてみた。

そして、今がちょうどその到着の頃合と思つたその時だった。

「バン・バン・バン…」

と、ドアの向こうで、肉のない手の平が叩いているような音がした。

(ひえ～ッ！　来たあ～ッ！)

僕の恐怖は頂点に達した。

(兄ちゃん～んッ！　兄ちゃん～んッ！)

と、僕は幾度も幼い頃、近所のいじめっ子からいつも護ってくれた頼もしい兄を靈界から呼んだ。

圭ちゃんの安らかな寝息がスヤスヤと耳元に聞こえる。

今度は、ひと際大きく

「ドゴン！　ドゴン！」

と、まるで硬い人の頭をドアに打ちつけるような鈍い音に変わった。

(しえ～ッ！)

もうダメだ…。

心臓がバツクン、バツクン破裂しそうだった。  
次の瞬間。

ガツキーンッ！

・・・・・

キューインツ！

といつ耳を裂くかのよつなものすゞこ金属音がしたかと思つと、外の妖しい気配はとたんに断ち消えたような感じがした。

「兄ちゃん…」

僕の頬に熱いものが溢れ落ちた。

僕と圭ちゃんは護られた。

なぜか、そんな確信があつた。

僕は恐怖疲れからいつしか夢魔の世界に落ちていった。

\* \* \*

高原の朝は鳥たちのさえずりと共に訪れた。

僕はまるで圭ちゃんの子どものよう聖母にすがる御子のよう

彼女に抱きついたまま田を覚ました。

「おはよ…」

「うそ…。おはよう…」

この世のはじまりは交わした挨拶からだつた。

ドアの傍らに運ばれた椅子と床下に落ちた定期入れの存在がタベ

の出来事がウソじやなかつたことを物語つていた。

スラリと長く白い足を露わにして圭ちゃんはベッドから降りると定期入れを拾つて見ていた。

「あら？ お兄さんの写真って、白黒だつた？

「ないだ見せてくれたときはカラーだつたでしょ」

「…」

そのワケを彼女に語ることも、とても僕には出来なかつた。

(後書き)

絵が次々に変わって死人が墓から出でてくる、というのは『真夏の夜の夢』というオムニバス映画だったと思う。  
高校時代にテレビで見たとき、あまりの怖さにびっくりんだ記憶がある。

このホテルは実際に倒産した某ホテルをイメージして書いた。  
圭ちゃんというのは、浪人時代ほんとに好きだった女の子だが、  
実は一度も話をしたことがなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3257j/>

---

廃屋にて

2010年10月28日03時36分発行